

山口県の地域振興と国際協力(4)

一周南市鹿野渋川の国境をこえた地域づくり

辰己 佳寿子

要旨

本稿は、いわゆる「先進国」が「途上国」を援助するという従来からいわれるところの「狭義の国際協力」ではなく、相互尊重の立場に立って互いが学び合い成長できるような「広義の国際協力」の実現をとおして、個人の生き方や地域のあり方における新たな価値の創造が可能であるとの仮説から、山口県周南市鹿野渋川と韓国全羅南道海南郡との国際交流から国際協力を展開する過程を整理し、触媒となっている山口大学の役割と、これらの地域振興・国際協力事業における成果と課題を検討する。

キーワード

中心と周縁，地域振興，地域連携，国際交流，国際協力

1 「周縁」から考える地域振興と国際協力

1.1 「周縁」に置かれる地域

日本でも韓国でも農村は「周縁」に置かれている。「都市」と「農村」，「都市」と「地方」，「都会」と「田舎」などの「中心」と「周縁」という二重構造のなかで、都市や都会は発展していて、農村・地方・田舎は遅れていると捉えられがちである。この優劣構造の「劣」の側におかれると、自尊心が損なわれ、劣等感を蓄積し、常に従属する立場に置かれ続ける傾向がある。

戦後、日本の農村は徹底的に否定され続けてきた。農村がもつ共同体的要素は封建遺制として近代化の阻害要因と捉えられ、その解体が進められてきた。農村は「カソカソと奇態なつぶやきをあげている村（椎名猛氏の詩の一部）」（山本，1986）として捉えられ、農村に暮らす人々も「私たちはいまさらほかの仕事にかかわることはできません。だから私一代は百姓をしますが、子供たちに百姓をさせようとは思いません」（宮本1972）という言葉に象徴されるように、子供たちを都会へ送り出してきたのである。

1.2 国内外の学術的・実践的な動き

農村の過疎化，都市の過密化が急速に進んだ高度経済成長の背景で、いわゆる「近代化」の意味を問う学術的および実践的動きが山口県およびその周辺では起こっていた。

1960年代になって、山口大学（当時）の山本陽三（農村社会学）や島根大学（当時）の安達生恒（農業経済学）が中心とした、共同体的な自治の活性化こそが農業・農村の振興のポイントになるという「ムラの再評価論」が登場した（木下，2006）。1982年には中国地方から「過疎を逆手にとる会」が生まれ、いわゆる「周縁」にある価値を見直そうという実践的な動きも生まれた。

1980年代前半には、山口大学（現学長）の丸本卓哉（土壌学）は「人間らしく生きるルールはどこにいったのだろうか」と疑問を投げかけ、研究者、実務者、政治家、行政・企業関係者、農家、青年海外協力隊OBなどに声をかけ、アジア農村の人的資源を開発する会（JaDHRRA: Japanese Branch for the Development of Human Resources in Rural Asia）を組織している。

JaDHRRAは、アジア農村の人間性と生活レベルの向上を目指し、相互尊重の立場に立って、真の農村開発のために奉仕する人的資源の開発を目的としている。

JaDHRRAが1982年に発行した『アジアへかける橋』では、東和大学（当時）の室靖が、「日本は“物”の点では非常に国際化がすすんでいる反面，“心”の面では、いまだに島国のなかに住んでいて、地球市民としての自覚がうすい」と指摘し、「人間が人間を尊重する文化、慈悲の心、助け合いの心、家族が一つの単位として老人を敬う、一つのコミュニティの不幸は、コミュニティ全体で悲しむ、長老が死ねば村全体が悲しむ伝統の価値観、大自然と調和した生活のたたまいを良とする価値観、このような共通の文化を掘り起こして交流することこそがアジアの人々と手を取り合うことの糸口である」と述べている。

さらに、東京都から参加した山田経三は、「強者と弱者の関係を越えずして，“心と心のふれあい”を説くことはナンセンス、アジアの人びとと、同じ裸の人間として対等の関係をもつことが基盤の第一であり、彼らとの交わりを通して、我われ自身が学ぶことが大切、我われが、経済的發展に目を奪われて、とかく忘れていた文化的、伝統的なものを“素晴らしい”と言われたとき、ハッとわが身に返る、このことを素直に受け止めて人間的価値を改めて大事にしたい」と述べている。

つまり、JaDHRRAは、1980年代から、「中心」に位置付けられた「先進国」が、「周縁」の「途上国」を援助するという従来からいわれるところの「狭義の国際協力」ではなく、相互尊重の立場に立って互いが学び合い成長できるような「広義の国際協力」の実現をとおして、個人の生き方や地域のあり方における新たな価値の創造が可能であるとの考え方を基礎に、真の国際人が出逢う

「場」をつくっていたのである。

1.4 問題意識を共有する人々が出逢う「場」の創出

昨今、国内外問わず、以上のような問題意識をもった人々が集まり、それぞれの専門性をもち役割を担いながら、協働関係をつくるネットワークが生まれつつある。このネットワークの質やつながりの強さは、国境をこえて異文化であればあるほどインパクトが大きい（JICA2008）。

JaDHRRAの例でもわかるように、このような「場」の創出においては、誰もがすぐにつながるができるわけではなく、中立的な立場で、常に国境をこえた普遍的テーマを追求し、グローバルで且つローカルな存在である地方総合大学が大きな役割を果たす。

現在、山口大学では、JaDHRRAの哲学を引き継ぎながら、国際協力の里ネットワークを構築しようとしている。それは、山口大学が触媒となって山口地域と国際社会とのかかわりを強化し、その活性化を図ることを目的としている。このネットワークは、山口県および近隣地域における産・学・公・民の密接な連携により、国際交流から国際協力への転換を通じた人材育成を狙っている。

本稿では、山口県周南市鹿野渋川の農村振興を事例としてとりあげ、山口県周南市鹿野渋川と韓国全羅南道海南郡との国際交流が国



渋川の冬の風景

際協力に展開する過程を整理し、触媒となっている山口大学の役割と、これらの地域振興・国際協力事業における成果と課題を検討する。

2 渋川の女性たちの地道な地域づくり

2.1 渋川の概要と女性組織

山口県周南市鹿野の渋川地区（以降「渋川」という）は、山口県山間部に位置し、県内では雪の多い地域である。2010年住民基本台帳によると、周南市鹿野の人口は3,891人（世帯数1,797）で、高齢化率は40.3%である。鹿野なかでも渋川は、人口120人（世帯数62世帯）で高齢化率は65.0%である。

このように厳しい状況下においても、渋川の女性たちは、明るく、たくましく、しなやかに、したたかである。女性たちの多くは、「嫁」として何も知らない地域に嫁いできて、そこで新しい人間関係を作り、仲間を作り、地道に活動してきた。

その典型的な例が、渋川的生活改善実行グループである。生活改善実行グループとは、戦後、全国的に展開された生活改良普及事業の一環で、農家女性の生活改善を促すためにつくられた女性組織である。生活改善実行グループの特徴は、問題を感じたらグループ員で常に話し合い、課題を明確にして、その解決策を実行するという課題解決型アプローチ



生活改善実行グループ（1986年撮影）

である。台所の環境改善、作業服の改善、栄養改善、家計簿記帳等からはじまり、さまざまな農家の問題に取り組んできた。さらに、このグループは、若嫁たちの悩みを共有し合う場でもあった。姑から「女というものは、そねえ、家を空けて出るものではない」と言われることもあったが、グループの仲間たちと会えば、いろんな話も聞けるし、「こうしたときにはこうするんよ」という知恵をもらうことができたという。

2.2 台所改善から地域づくりへ

渋川的生活改善実行グループは1960年代に発足する。1970年代には集会所・加工所を建設し、1980年代には長野山緑地公園の経営に参入。女性たちは徐々に社会的・経済的能力を高めていき、活動の「場」が台所から地域へと広がった。

2003年には、生活改善実行グループが中心になって、過疎化、少子・高齢化の地域の課題を解決するために、「渋川をよくする会」を結成した。全戸加入の団体である。

「渋川をよくする会」の役員は、自治会長や中山間地域等直接支払制度の集落協定世話人、生活改善実行グループなどの組織の代表22人で構成されている。地域全体の活動である場合、男性中心になる傾向があるが、この役員構成は男女半々となっている。男性たちから「女性たちが前にでてやってみんか」との声が上がり、会長には安永芳江さんが抜擢された。女性たちの地道な活動が男性たちに認められた瞬間であった。

「渋川を良くする会」は、その後、荒れた田んぼを花壇にする取り組み、盆踊りやしめ飾りなど渋川の伝統文化や高齢者のもつ技術の伝承、子供たちのための川の遊び場づくり、地域資源点検と行動計画の作成などに取り組んできた。2007年には農山漁村いきいきシニア活動表彰最優秀賞（農林水産省経営局長賞）を受賞した。



しめ縄づくりの講習会

3 韓国からの訪問者（2009年7月）

3.1 素朴な農村がみたい

2009年6月、韓国から山口大学のエクステンションセンターに連絡が入った。韓国と日本の農村を比較研究している韓国人研究者の玄義松さんからであった。「私は日本中の農村をたくさんみてきましたが、モデル的な農村ではなく、素朴な農村を訪問したいのですが、案内してもらえませんか」という依頼であった。

玄義松さんは、ソウル大学卒業後、韓国の農協に入り、農協の会長や農業新聞の社長を経験し、エリート人生をまっしぐらに走り抜けてきた。40数年間の自分の人生を振り返って「私のこれまでの人生は、仕事一筋、趣味もなし、本当につまらなかったと思います。今、日本や韓国の農山漁村の方々と出逢って、人生を楽しんで、いきいきと暮らしている様子を見るとうらやましく感じるがあります」という。現在は、NPO韓日農業・農村文化研究所の理事長を務めながら、自分の農地を耕し、日本や韓国の農山漁村を歩き回って農村の文化の重要性、農村の豊かさに関する講演や調査などを行っている。

2009年7月、山口大学エクステンションセンターが触媒となって、渋川を訪問するこ

とになった。

3.2 キムチづくりを習いたい

2009年7月夜、渋川の石船温泉で、玄義松さんの一行（玄義松さん夫婦とその友人の合計4人と山口大学エクステンションセンター教員辰己佳寿子）と渋川の人々が集った。渋川からは、「渋川をよくする会」の安永芳江さん、自治会長の安永守さん夫婦、山口県ルーラルガイドの植田忍さんと忠代司さん夫婦、山口県農家生活改善士・渋川民生員の山崎弘子さんと美治さん夫婦が出席をした。

地元の料理を食べながら、現在の農業・農村に関する談義が始まった。初対面とは思えないほど打ち解けた。すぐに仲良くなれたのは、互いが農業・農村のことを真剣に考えていて、日本も韓国も過疎化、少子高齢化という共通の課題を抱えているからである。

話題が農業・農村問題から徐々に「食」の問題に移行していったとき、玄義松さんの奥さんが、「韓国のキムチは、白菜、キュウリ、大根などさまざまな種類があり、家庭によって味が違うのです」と言った。間髪入れずに、植田忍さんが「本場のキムチの作り方を習いたいです!」といった。そして、渋川の女性たちの間で「韓国にキムチを是非習いにいきたい!」との話が持ちあがった。交流会の話が、数カ月後、現実のものとなる。



石船温泉（於渋川）での交流の様子

3.3 身の丈にあった生き方と風土

翌日、玄義松さん一行は、農家レストラン「たぬき」を訪問する。「たぬき」は寺戸光政さんとひろみさんが2007年に開業した。寺戸夫婦は27年間、スーパーを営んできたが、仕事に追われる日々が続く中で、ひろみさんの偏頭痛が悪化したため、渋川にUターンをして、農林業に従事しながら週末だけ農家レストランを営業している。

多くの人々が地域づくりの現場に来ると、「売り上げはいくらですか?」「来客数は何人ですか?」と数字に関する質問をする。有名なところは、何億円もの売り上げがあり、経済効果が地域を活性化させている。たしかに、地域活性化はきれいごとだけでは成り立たない。対価が支払われること、そしてそれなりに経済的余裕が生まれることは重要である。ただ、渋川の人たちは決してもうけ主義には走らない。自分たちの暮らしを大切にしながら経済生活を営んでいく絶妙なバランス感覚がある。

寺戸さん夫婦は「儲けようと思ったらいろいろできますが、そんなことをしたら、何のためにスーパーを辞めてここに戻ってきたかわからなくなってしまいます。私たちにゆとりがなければ、迎えるお客さんにもそれが伝わってしまいますから」という。

渋川には、「地域にあるもので、できる範囲でやっている」「身の丈にあった商売を」「儲け主義に走ったら、いなか暮らしのよさがなくなってしまう」と経済だけに傾斜せず、生産や経済でさえも暮らしの視点からみていく、そういう風土がある。

4 山口大学公開講座「生活改善ってなに?」(2009年10月)

4.1 山口大学と渋川の地域連携を中心とした公開講座

山口大学は、社会連携、地域連携の組織的

総合的取り組みを推進する機関として、

2003年にエクステンションセンターを設置した。基本理念は、「山口大学が持つ人的、知的資源の有効な活用により、地域社会との多様な連携を推進、地域の教育・文化の振興を支援するとともに、社会連携を通して地域に開かれた『発見し はぐぐみ かたちにする知の広場』の実現を図る」というものである。特に公開講座はエクステンションセンターの中心的な事業であり、昨今は地域連携を中心としたフィールド型の公開講座に力を入れている(辰己・高橋 2010)。

2009年10月、山口大学と渋川の地域連携を中心とした公開講座として、「生活改善ってなに?山口県生活改善運動の今と昔」というフィールド型の講座が開講された。一般的に「生活改善」というと、台所の環境改善や栄養改善などと限定して捉えられがちであるが、この講座では、元生活改良普及員の体験談や生活改善実行グループの活動、海外の農村での普及活動などを通して、「豊かな暮らしとはなにか」「誇りとはなにか」「生きがいとはなにか」「むらを基点とした生き方や地域づくりとは」などの普遍的なテーマを、渋川の生活改善の現場で、受講者、講師、地域住民が共に考えていくというものであった。渋川の奥山である長野山緑地公園に宿泊するオプションコースを含み、講座概要は以下のとおりである。

2009年10月10日(土) 13:00~16:10

(於山口大学吉田キャンパス:山口市)

- ・辰己佳寿子(山口大学エクステンションセンター准教授)「今、なぜ生活改善なのか」
- ・藤井チエ子(元山口県農村女性・むらおこし推進室長、元生活改良普及員)「生活改善からみえてくる女性の生き方」
- ・坪郷英彦(山口大学人文学部教授)「住生活改善はどのように受け入れられたか—山

口・埼玉の事例一」

< 山口市→周南市鹿野渋川長野山へ移動 >

- ・夜談講 19:00～地元の食材を活用した夕食をみんなで食べながら「長野山の自然の中で生活改善を考える会」を開催。

(於 長野山緑地公園：周南市鹿野)

2009年10月11日(日) 9:00～12:30

(於 長野山緑地公園：周南市鹿野)

- ・安永芳江 (渋川をよくする会会長)
「みんなで支え合い、地域を守る渋川」
- ・植田忍 (山口県ルーラルガイド)
「長野山から豊かな自然と住みよい地域を考える」
- ・山崎弘子 (山口県農家生活改善士)
「集落点検から未来の渋川を想う」
- ・太田美帆 (東京大学大学院新領域創成科学研究科助教) 「海外に広がる生活改善」

4.2 公開講座受講者の声

受講者は、20歳代から60歳代にかけて大学院生、会社員、大学教員、農家など12名が参加した。受講者からは以下のような声が寄せられている。

- ・さまざまな立場から、視点から、講義をいただき本当に勉強になりました。この度は体験型の講座(お話を伺い、訪問し、美味しいご飯をいただくなど)を、どうもありがとうございました。
- ・一泊二日のプログラムの運営は素晴らしい。初日の講義と二日目の現地発表方式による構成が効果的であった。理論と実践のつながりを理解する上で参考になった。
- ・今回のテーマである「生活改善」について、表面的・表層的な理論ではなく、実際に活動に深く関わってこられた方々や様々な立場からのお話を伺うことができ「知に足の着いた」深い話を聞くことができました。これは個人では不可能で、信頼関係に基づくネ

ットワークを持つオーガナイザーが企画した公開講座だからこそ可能になった内容だと思います。貴重な場に参加させて頂いたことに感謝申し上げます。今回学び考えたことをどう自分のフィールドに活かしていけるかという点については、まだまだ考察の時間が必要だと思いますが・・・。

4.3 公開講座から国際協力へ

この公開講座終了後、翌年の公開講座の開催について山口大学から依頼をしたところ、渋川からは以下の回答が返ってきた。「公開講座は良い経験になりました、それはそれとして・・・キムチづくりを本気でやりたいのです」「廃校になった小学校が加工所になるから、新しい加工品の開発を考えちゃるんですよ」「こういうときのために、私らはお金をちよつとずつ貯めてきとるじゃからキムチを習いに韓国へ行きましょう」というものであった。

渋川では少子化の影響を受けて1993年に渋川小学校が休校となり、2009年に廃校となった。その跡地に地域振興のための加工所を建設する計画が浮上していた。つまり、渋川の女性たちにとっては、キムチづくりが単なる「学び」ではなく、次の地域づくりを展開するため戦略のひとつとして位置づけられていたのである。



山口大学公開講座の様子

生活改善から地域づくりへ展開してきた渋川の活動。交流から滞在、定住へという政策どおり、UJIターンも少しずつ増えつつある。そして、新しい住民と地元の人々の交流も行ってきた。子どもの体験や都会との交流、家族協定までいろいろな活動が行われてきている。しかし、現在、活躍しているのは、いわゆる高齢者。これまでの数十年は走り続けてきたが、実は、これからの十年の地域像が明確にみえていない。これは多くの農村でも共通している課題である。今、次へ一歩踏み出す何かを農村では求められている。

安永芳江さんの「次を考えるために、国境でも越えてみようかなと思ひまして」という言葉が、その状況を象徴している。

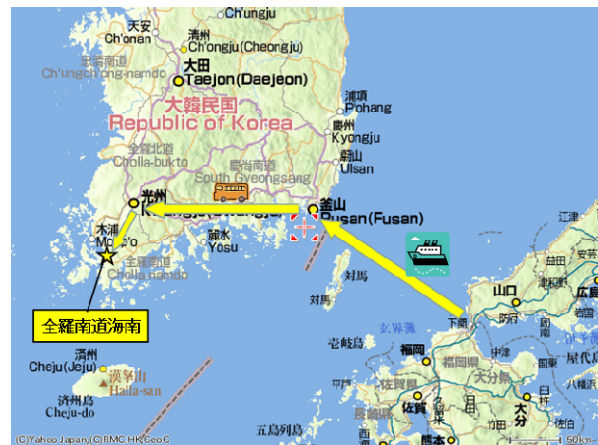
5 韓国全羅南道海南で「農村（渋川）」と「農村（海南）」が出逢う（2010年3月）

5.1 いざ、韓国へ

以上のような経緯から、2010年3月5日～11日まで、韓国の農村（全羅南道海南郡）を訪問することになった。メンバーは、2009年山口大学の公開講座の講師を務めた安永芳江さん、植田忍さん、山崎弘子さんと、Uターンで農家レストラン「たぬき」の女将の寺戸ひろみさん、周南市鹿野へのIターン者である藤永静江さんと山口大学エクステンションセンターの辰己佳寿子、合計6名であった。

韓国側の受け入れは、2009年7月に渋川を訪問した玄義松さんの取り計らいで、海南サイバー農業人研究会が担当することになった。この団体は、韓国全羅南道海南郡でUターンやIターン者が新しい農村づくりに取り組んでいる農家の集まりで、インターネット販売を中心に行っている。

日程は表のとおりである。宿泊は、農家との交流を深めるための農家でのホームステイ、文化を体感するためのテンプルステイや



<日程表>

3月5日	午後	下関国際港発（フェリー泊）
3月6日	午前	釜山→光州→海南（バス） イチゴ栽培の視察
	午後	美黄寺の文化とお茶について（講演） 海南サイバー農業人研究会との対面（自己紹介） （宿泊：テンプルステイ）
3月7日	午前	朝の礼仏と座禅。ウニャン茶園有機農産物試飲 「食」を通じた日韓の農村交流（各料理試演）
	午後	（宿泊：伝統的家屋の旅館）
3月8日	午前	セミナー：渋川の取組について発表
	午後	韓国伝統菓子試演、キムチ漬け体験学習 海南サイバー農業人研究会との意見交換会 （宿泊：農家でホームステイ）
3月9日	午前	人と自然を尊重する伝統文化団地の取組視察
	午後	海南→釜山（釜山泊）
3月10日	午前	打合せ（研修の成果と今後の展開について）
	午後	釜山国際港発（フェリー泊）
3月11日	午前	下関国際港着

伝統的家屋であり、地域づくりに関する意見交換を行うセミナー、食を通じた交流、キムチ講習会などが行われた。

言葉の不安はあったが、日本料理と韓国料理の食の交流会で互いが料理を作り始めると、女性たちは、言葉がわからないのに、「これはなに？」「これはどうすればいい？」「あれはない？」「いやいや、こうやるのよ？」と、コミュニケーションをはかっていた。

5.2 キムチづくりを学ぶ

キムチ講習会では、海南サイバー農業人研究会のなかでも「キムチ名人」といわれる呉英心さんが講師となった。韓国のキムチも作り方が簡素化されたり、工場で作られるものを購入する傾向が増えているが、呉さんは家の秘伝のキムチの作り方を祖母から受け継

いでいた。

白菜の切り方、塩の付け方、唐辛子の混ぜ方などひとつひとつ丁寧な説明で講習会が進んでいった。ただ、「だし」については、はじめから用意されていて、それらを混ぜるだけだった。しばらくして、渋川の女性たちの方から「あの～、だしのとり方はどうなんでしょう。秘伝なのでしょうか、分量を教えてもらえないでしょうか。それを知りたくて、私たちははるばる日本の山奥からここまで来たのです。どうか、お願いします」。呉さんは、ちょっと困った顔をしながら、肩をすくめて、少し悩んだ結果、だしのとり方を説明した。渋川の女性たちは、ひと言も聞き洩らさないよう熱心にメモをとっていた。

5.3 同時代的課題に共鳴しあう

キムチづくりが終わった後、海南での最後の夜の交流会が始まった。「みなさまの温かさが心に浸み込んできました」と安永芳江さんが涙声になりながら挨拶をする。

交流は、ただ楽しいだけで終わったわけではない。渋川で民生委員も務めている山崎弘子さんが、渋川でのひとり暮らし老人の孤独死の話 시작했다。「ちょっと前まで元気だったのに、見つけた時には息を引き取って時間が経っていました。これが今の限界集落の実



韓国海南での交流の様子

態なのです。私でできることはなんとかやっ
てはいるのですが・・・」と現状を吐露した。

これは渋川だけの問題ではない。そして、日本だけの問題でもない。海南のメンバーからは、「韓国は日本よりも高齢化のスピードが速くて、高齢者がどう生きていくか、個人の生き方が問題になっている。個人がどう生きるかを現代ほどつきつけられる時はないのではないか。是非、一緒に考えていきましょう」という意見が出た。

この日韓の出逢いの場は、それぞれの農村で屹立している農家が出逢うことで、自信や誇り、やりがいを感じ、国境を越えた共通課題を考え、学びあう場であったといえる。生きることの意味を問う姿勢に国境はない。最後のお別れの場面では、気丈な女性たちが最後に涙を流し抱き締めあった。

6 周南市鹿野渋川で「農村（渋川）」と「農村（海南）」が再会する（2010年7月）

6.1 日本での再会

2010年7月、海南サイバー農業人研究会のメンバー、全南農業技術研究院の研究者、海南郡農業にかかわる行政関係者、大学関係者など20名が渋川を訪れることとなった。その内容は、周南市や農林事務所の取り組み、行政と地域の連携のあり方に関する勉強会、農産物加工所および直売所、道の駅等の視察、むらづくり活動検討会「どうやってつくる！後継ぎが帰りたくなるむらづくり」ワークショップ（周南市の4地域、留学生、日本人学生、韓国訪問団でグループに分かれて意見交換→発表）、加工所建設予定地の視察（→韓国側から助言を得る）、農家ステイや文化交流であった。

山口大学としては、地域連携・社会連携事業から国際協力の里事業へと体制を切り換え、山口大学国際協力の里推進体が触媒とな

って周南地域と韓国訪問者とのかかわりを強化し、それぞれの活性化を図る方向で、全面的にバックアップすることとなった。実施体制は図のとおりである。これらの交流事業は、「渋川を良くする会」が中心となって実施したが、周南市農林課・いのち育む里づくり課、周南市鹿野支所、周南農林事務所、渋川の各自治会、NPO 日韓農業農村文化研究所、徳山大学、広島修道大学、そして山口大学の教職員・日本人学生・韓国人留学生など多くの人々が出逢う「場」となった。

6.2 参加者の声

< 渋川側 >

・下関に海南一行を迎えに行った時、遠い昔に別れた人に会いに行った時の気分でした。海南のみなさんの顔を次々に見たときは、とても懐かしく思えて嬉しかったです。

・海南の方々の人間性に触れ、考え方に触れ、私自身パワーをいただき、勉強になりました。海南の方々に負けないよう技術を磨き、前向きに努力していきたいと思った。

・海南の方々の前向きな姿勢、パワーを感じ、刺激を受けた。ものごとを楽しく進めていく姿勢に感銘を受けた。商売熱心であり、我々も学ばなければならないと痛感した。

・渋川地域の方々に参加してくれた（高齢者から青年、子供達も）。渋川地域のみんなで受け入れようという雰囲気があった。渋川の人々で話し合いながら進めてきた過程は評価できる。

・海南の人々を受け入れることで、鹿野内や周南市内など関係者と知り合う機会になり、国内のネットワークが広がった。夫婦間や渋川地域の人々、鹿野の人々、周南市の人々などつながりも強まった。

・これまで他人を家に泊めるこ

とに躊躇していたが、今回のホームステイでは、それぞれの家族がそれぞれのおもてなしをした。ホームステイの夜は、農業の話、暮らしの話、文化の話など、夜遅くまで話し込んだところもある。韓国に行っていない家庭も協力してくれた。

・山口大学、徳山大学、広島修道大学、木浦大学（韓国）の日本人学生や留学生、通訳の方々、行政、大学関係者が参加し、それぞれの役割を果たしてくれてたいへん助かった。若い人たちが参加することで活気が出た。

・海南の男性たちが後片付けなどよく動いてくれたので、渋川の男性陣も刺激を受けたようだ。反省会ではどうちゃんたちが食器を洗っていた。たとえば、ホームステイ受け入れにあたって、どうちゃんたちが家の掃除をしていた。驚くべきことである。

< 韓国側 >

いろんな場所を回って、そして考えて、そうする中で周南市の農業について学ぶ点と改善点に分かるようになりました。私たちにとって本当に有益な時間になりました。今回の交流を通して韓国と日本の農業の現況を比べながら両方とも大切なことがあることをしみじみ感じました。互いに苦しい状況だとしても農業と農村は私たちの希望だと思っております。

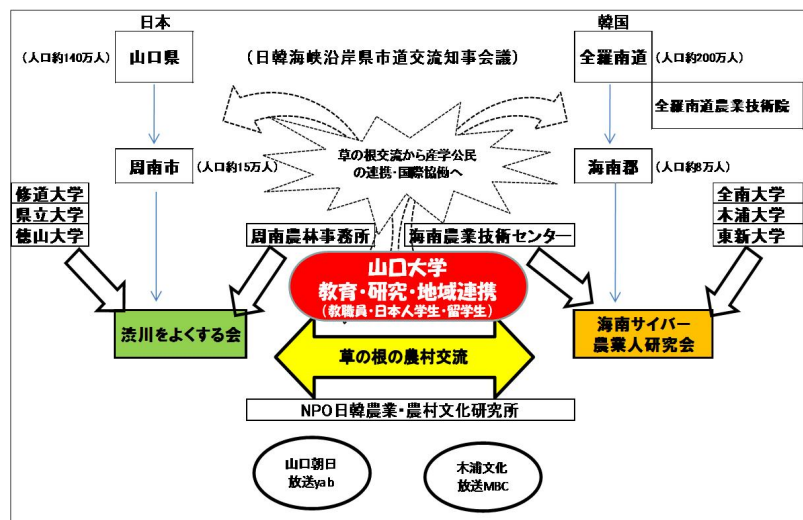


図 実施体制



むらづくり活動検討会の様子

ます。特に地域住民が前向きになって自らのマインドを育ていくのが一番大事なことだと思っております。皆が自分の地域づくり方案について頭をひねって考え、計画を立てて、そして協力しあっていけば必ず住みたくなる農村になり、後継ぎがどんどん帰りたくなる地域になることに間違いありません。これからもお互いに農村、農業、農民の発展方案について研究と交流を続けていくことを願っております。再び申し上げますが、今回のプログラムにご協力して下さった皆さま心から感謝のお言葉を申し上げます。お互いに協力し合って効率的で安定的な農業ができ、人々が住みたくなり心豊かに暮らせる農村をつくりましょう。

<山口大学留学生>

- ・最初は、通訳の負担が強くありましたが、日本の方も韓国の方も、すべての方々が私たちに家族のように親切にしてください、良かったです。
- ・現在、韓国と日本の地方の状況が似ているし、それらの問題に多くの方が研究して努力していることを知りました。
- ・農村の問題は、地域経済、都市格差などの理論的な部分ぐらいしか知らなかったのですが、実際に現場にいったことで、地域産業の経済的な面についてももう一度考えて見て、自

分でもっと勉強してみたいというきっかけになりました。

- ・文化が異なる地域がお互いを理解するには、多くの時間がかかると思いました。交流とは、一方が相手を説得するのではなく、相手と自分が自然にひとつになるように、水が流れるように行われるのが理想ですが、まだまだ努力が必要だと思います。

- ・都市出身なので、田舎ははじめてだったのですが、思っていたより快適だったし、不思議なものがいっぱいでした。日本の田舎を体験するのは簡単にできることではありませんが、こんな機会をくださった関係者の皆様に心から感謝します。

<山口大学日本人学生>

- ・むらづくり活動検討会では、韓国側と日本側によるむらづくりについて話し合いをしました。そこで人によってむらに対する見方が違うことに気付きました。日本側と韓国側の真剣な想いを聞くことができました。

- ・ホームステイ先の方の話から渋川が抱えている問題を聞いて、少子化が進んでいる日本ではこれから先同じような問題が全国各地で起こりうると思いました。私の実家も田舎で、同じような問題を抱えているので、人ごとじゃない気がしました。

- ・私が特に刺激を受けた出会いは山口大学に来ている韓国人交換留学生との交流でした。彼らは我々と年齢はあまり変わらないのに、外国語である日本語をととても流暢に話すので、韓国の学業のレベルの高さを思い知らされました。

私は英語も韓国語も全く話せないのに、今回のイベントで韓国の方に話しかけられても笑顔でごまかすことしかできず、本当はもっと交流したいのにできないという悔しい思いをしました。しかし、わからなくても懸命にわかるまで話しかけてくれる方もいて、そんな方々と話しをするのはとても嬉しかったで

す。私はこの悔しい思いと嬉しい思いをバネに、もっと国際交流に興味を持ち、将来の自分に役立てていきたいと思っています。

6.3 今後の課題

参加者の声からもわかるとおり、参加者それぞれがさまざまな思いをもって参加しており、国境をこえた人々が出逢う「場」とおとして、個々人の考え方や行動に何らかの影響が及んでいる。海南との関係構築はいうまでもないが、受け入れをおとして、夫婦間や地域内外の交流が活発になり、連携体制がつけられたこと、留学生や日本人学生たちの問題意識を喚起したことは注目に値する。

丸本（1995）が、真の国際人を、「地球上のあらゆる問題を身近な問題としてとらえ、その解決策について国際的視野に立って考え、それを自分自身の活動として実行に移すことのできる人」といつていたように、そういう芽が少しでも芽生えてきているのではないだろうか。

今回の受け入れ事業をおとして、以下のとおり、いくつかの課題が明確になった。

- ・先方の農業の状況や地域の状況、生活状況などを把握していなかった。事前に勉強会を開いていたらもっと理解が深まった。調査研究が必要である。

- ・今回の受け入れは、渋川にとっては、大イベントとして位置づけられる。初回としてはたいへん意味のあることである。今回、海南の方々から刺激を受けたので、これを機に強まったつながりを発展させ、今後は、直面している渋川のむらづくりの課題解決へ、少し内側に目を向けて実行していくことが重要である。ある意味、これからが本番である。

- ・このような交流は、続けていくことが大事だが、受入側が無理をしては続けることは不可能。今後は民間レベルで、少人数体制、地域で受け入れられる規模、そして、「量」よりも「質」を追求することが重要。



山口大学訪問

- ・行政や大学の役割はあくまでも支援や触媒。山口県、周南市、山口大学はそれぞれの得意な分野で協力していくことは可能だが主役ではない。協力体制は構築されつつあるので、今後は、地域が中心になって民間交流をどのように進めていくか、地域側の事務局機能や実施体制の確立が重要。そうすることが、海南との交流だけでなく、今後の加工所建設および加工所を通じたむらづくりを実行していく体制につながる。

- ・今回の経験を通じて、渋川もしくは鹿野のスロー・ツーリズムの受け入れスタイルの確立が可能である。今回得られたノウハウや改善点が、今後、地域外（国外も含めて）の人々を受け入れる「渋川型のスロー・ツーリズム」のあり方を検討していくきっかけとなる。

7 地域と地域がなぜ共鳴するのか

本稿で事例として取り上げた山口県周南市鹿野渋川は、いわゆる「限界集落」（65歳以上の高齢者半数以上の集落）と呼ばれているが、そういう状況下においても、農業・農村で屹立し、自分たちの地域の良さや人間らしさを再確認し、農村の地域振興に励んでいる地域である。

日本だけでなく、韓国においても、少子・

高齢化、農村の過疎化が深刻な課題となっている。首都ソウルへの一極集中化が進み、一方で、農村の過疎化や少子・高齢化は日本よりも速いスピードで進んでいる。農村に残る人は「負け犬」といわれるほど、農業・農村が周縁におかれ、農村を去りソウルを目指す傾向が強くなっている。しかしながら、昨今、韓国でも、豊かに生きることの本質的な意味を問いながら、信念をもち、農業・農村に誇りをもって、農村で屹立しているものもある。本稿で紹介した韓国全羅南道海南郡の海南サイバー農業人研究会はその先駆けである。

周南市鹿野洪川は「限界集落」と呼ばれ、韓国・全羅南道海南郡は「地の果て」と呼ばれているように、両地域とも負のラベリングをされており、地方のそれもまた僻地に位置している。しかしながら、両者とも、負のラベリングをされても、農村で屹立し、地域のために当事者性をもって本気で農業・農村にかかわっている。このような人々が、国境をこえて出逢うとき、それぞれの信念や誇りを確かめあい、国境を越えた普遍的な共通課題を考え、学びあうことが可能となる。

一連の過程において、山口大学は、同時代的で普遍的で現代的な切実な課題を自由に話し合い学び合うことのできる「知の広場」を創出しているといえる。このような「知の広場」をとおして、さまざまな立場の人々が、相互尊重の立場に立って互いが学び合い成長できるような「広義の国際協力」の関係性を築くことができれば、個人の生き方や地域のあり方に関する新たな価値が創造される可能性がある。

(エクステンションセンター 准教授)

【付記】

本事業は、洪川を良くする会、洪川自治会、周南市、周南農林事務所、山口朝日放送、広島修道大学、NPO 日韓農業農村文化

研究所、海南サイバー農業人研究会、海南郡、海南農業技術院、全南大学、木浦大学、東新大学など多くの方々のご協力のもとに成り立つものです。紙面上、お名前をあげることにはできませんが、この場を借りて、みなさまに御礼申し上げます。

【参考文献】

- アジア農村の人的資源を開発する会 (JaDHRRA), 1982, 『アジアへかける橋 第4号』。
- 木下謙治, 2006, 「農村社会学研究の個人的回顧」『村落社会研究』第12巻第2号, 1-6。
- JICA (国際協力機構), 2008, 「まちづくりの経験を世界へ 第五回 山口県阿武町 地域も学ぶ「双方向の国際協力」『Monthly JICA 9月号』, 30-31。
- 宮本常一, 1972, 『村の崩壊』(宮本常一 著作集第一二巻) 未来社。
- 辰己佳寿子, 2011, 「洪川のおばちゃんたちが挑む地域づくり」『支援のある風景』世界思想社(印刷中)。
- 辰己佳寿子・高橋肇, 2010, 「少子・高齢化社会と生涯学習に関する研究(4)」『大学教育』第7号:115-129頁。
- 辰己佳寿子・農文協「農村文化運動」編集部, 2009, 『「女性の力」で地域をつくる, 農村文化運動194号』農山漁村文化協会。
- 山口大学国際協力の里推進体, 2010, 『キムチが生んだ国際交流—国境を越えた地域づくり』(国際協力の里事業報告書)。
- 山本陽三, 1972, 『風と土と人と』御茶の水書房。